

行書の領域私考

— 行書とは何か —

序章

書を学ぶ時、書体の理解は大切なものとなる。
綜合書道大辞典には書体のことを次の様に記している。

書体

たいてい漢字には、古文、篆書、隸書、楷書、行書、草書の

六つの書体がある。中国において、紀元前、二五〇〇年頃象形文字が芽生え、時代が移るに従って創造されてでき、現在に定着しているのが六つの書体である。

資料(1)

書写に便利という実用面で欲求と、人間の持つ美意識がこれらの書体を生んだもの。
(鈴木方鶴)

書体を改めて見る時、内なる感情の表現が主となる行書は昔から人々に使用され、その実用性は十分理解されて来たが、外なる型式表現が主となる秦代では篆書、漢代では隸書、現代では楷書にと、それらに対する依存度は行書より根強いものを感じる。

だから現代人の書学習の導入は楷書で始まる。行書は楷書の影に隠れ、その次なる物の意識が強く、楷書の存在物や共有物とすら思われている。

そこで「行書は楷書のみを速書きしたもの」が一般的な考え方となったこともある。

綜合書道大辞典の中にて鈴木方鶴氏は次の様に記している。

荒 金 信 治

行書 しぎょう 漢字の書体(篆・隸・楷・行・草)の一つ。楷書

と草書の間書の書体で、今日実用の面では最も多く使用されている。

その起源は、前漢の末から後漢の中期にかけてで、漢代に行われた

隸書から草書、楷書ができ、この両者の長所をとって行書ができ広

く使われるようになった。晋代になって、王羲之、王献之の出現に

よりいよいよ盛んになり、尺牘(手紙)によってその美を競うよう

になり、ますます洗練され、その美しさを定着させた。行書には、

隸・楷に見られない柔らかさと流れの美しさがある。漢代に生れ、

晋代に完成された行書は、隋・唐・宋・元・明・清と各時代特有の

美しさを見せながら今日に及んでいる。(鈴木方鶴)

資料(2)

一九〇〇年前後、スウェーデン・ヘディン、アウレル・スタインらによって楼蘭や敦煌等の地に於いて漢代の木簡が発見された。

その中には次の様に完成された行書の形体が数多く存在していた。

資料(3)

これらの木簡を行書として取り扱ってよいのか、これら木簡の書体の分類上の扱い方に苦勞した。

発見された木簡の中には隸書の楷書的表現も数多く存在していたが、現在では「隸書の楷書的表現を速書とした行書」の理解の上で、「行書の起源を漢代」とする人（前述資料(2)参照）も多くなった。

行書についての理解は、いま一段落しているのが現状である。

そんな時、「いま改めてなぜ行書なのか」と言われるかもしれないが、先人の説明にいま一つ納得がいらず、行書そのものに対する理解の基盤が、私の考え方と大きく違っていた為にこの論文を書き始めた次第である。

第一章に於いては行書に対する認識の現状とそれについての私見を述べる。その為には行書を研究する上に於いて必要な語句の私案定義を行い、論を進めることに不自由のない様にした。

その私案定義の一つに正書体・非正書体の名称がある。この名称は勿論辞典にはない。綜合書道大辞典には次の名称はある。そして、それに対する説明は、

正書せいし ↓ 楷書かいし
資料(4)

とだけある。

「正書をどうして楷書と同意で使ったのか……。」で悩んだ。もしかしたら「漢代に於いては隸書が正書であって、秦代に於いては篆書が正書と同意だったのではないか……。」又、「正書が楷書の義だったとしてもそれはすべての楷書を指すのではなく、形の整った当時の通常形体のみを示していたのではなかったのか……。」と、想いを巡らし、正書に対しての追求は深まっていった。その結果、私案として「正書体・非正書体」を示した。（詳細は後述P15・P27を参照）又、行書の理解を進める為に、一時、行書と行書的表現に分けて、行書ではなく行書的表現の出現期を出来るだけ遡さかのぼらせて、行書そのものの生態に

触れてみたい。

第二章に於いては「行書とは何か」を中心に現在の行書に係る問題を挙げ、現存する古典の中から行書についての見解を示してみた。

第三章に於いては「行書」について考える観点を立て、過去から現代に至るまでの行書の姿を独特な見方で観察し、より一層の行書の理解に務めたい。その上で第二章と比較することにより、行書が持つ性格を明確にしたい。

おわりに於いてはこの小論の結論へと繋がっていく。

○現在知られていない行書の生態を知ること。

○なぜ行書を学ばなければならないのか。

○現代社会が行書を何を求めているのか。

○いうことを全体を通して考えてみたい。

そして、行書を従来のように、他の書体に付随させて考えるのではなく、それ自体独立した価値を持つものであるという認識が新たにあれば幸甚である。

尚、文中の(A) (S)は、私見・私案・私的定義の部分である。

第一章 行書に対する認識

第一節 行書とは

1 行書に係る語句の定義付けと行書が存在する位置
行書についての現在の理解は次の様である。

(A)楷書・隸書の附属品的理解

行書は楷書・隸書を速書したものの、楷書・隸書に比べて速く書くことに適したもの

(B)行書の存在的位置理解

行書は、略し方の上では楷書と草書の間位置する書体（中教出

版・改訂新版書道芸術Ⅰ)

(F) 行書の起源の問題

漢代に始まり、東晋時代に芸術的に完成されたと言われている。

(中教出版・改訂新版書道芸術Ⅰ)

これは、「漢代に隸書ならびに隸書の中の楷書的表現を速書きして行書が始まり、東晋代に王羲之を始めその時代を背負った人々によって芸術的に完成されたもの……」の意だろう。

私の行書に対する考え方は現行の内容と根本的に異なり、行書の捕え方と見る目の位置が全く違っている。

前に示した(出)を图示すると次の様である。

(出)の行書の附属品的理解に対する現在の考え方

楷書 ↓ 速書きをする (揮毫中文字の歪みが 生じることを含む)	隸書 ↓ 速書きをする	篆書 ↓ 速書きをする	古文 ↓ 速書きをする
行書	篆書	篆書	古文
行書	行書の起源	篆書	古文

①書体名
②作業
③速書きをした結果の名称

(一九〇〇年前後に木簡が発見される以前)
(一九〇〇年前後に木簡が発見されて現在まで)

資料(5)

それに則して私見を图示すると

(A) 行書の附属品的理解に対する私見

楷書 ↓ 速書きをする	隸書 ↓ 速書きをする	篆書 ↓ 速書きをする	古文 ↓ 速書きをする
行書	行書表現	行書の表現	行書の如き表現
行書	行書	行書の表現	行書の如き表現
			結果の名称
			私案行書
			④私見

資料(6)

私案は、まず各書体である①を速書きすることによって出来た表現を

③とする。各書体によって変わった表現型式を理解することによって

④の私案行書へと更に理解を進めていきたいという希望を持っている。

現行の行書自体に対する意識変更は必要となる。

(出)に対して(楷書・隸書の附属品的理解)

確かに現行通り、楷書や隸書を速書きした書の表現は行書であり、楷書や隸書を共存する表現の中に行書は存在する。しかし、これのみが行書ではない。周・秦代の竹簡が発見され、「篆書を速書きしたのも、行書とすべき」と考える。これは、「木簡の発見によって唐の

令 巳 具 突 而 吏

(書道全集・平凡社)

竹簡資料(7)

篆書の行書の表現を見る

楷書を速書きした行書から、漢の隸書を速書きした行書の理解へと移行したように、漢の隸書を速書きした行書から、秦の篆書を速書きした行書への考え方に移行したのみであるから当然のこと」と言える。そこで私は「楷書とか、隸書とか篆書とか、言った一つの書と共存す

る」とした行書の理解をやめ、「まだ人類が文字を書かず線で描写を初めたころから、未来に至るまで人類が存在する限り、行書は普遍的に存在するもの」の考え方にまで進展させた。

人間の心理によって行書表現の存在は、その姿を現わしたり、消えたりするものであって、時代や、国や、漢字を使用するか否かに関係はない。感情表現されたものは以前より存在していたのであって、中国に於いてその感情表現された文字のことがたまたま行書又、行書の表現と呼ばれるようになったと見ている。(後述P18〜19参照)

(B)ここで、これから行書を説明する上に於いて必要な語句について、私なりの定義付けをしておく。

(イ)行書とは、

現行の楷書・隸書を速書きしたもの、時によっては私案行書を含む。

(ロ)行書表現とは、

(1)行書を表現すること。書を書く時の書表現。

(2)現行の行書感覚から見て行書と断定出来にくい、行書ではない

か又、私案行書ではないかと思われる表現。

(3)木簡が発見されて隸書を速書きしたものを行書とした様に、将来

なんらかの物が発見されることによって行書と見られるのではな

いかと想像されるものの表現。

(イ)行書の表現とは、

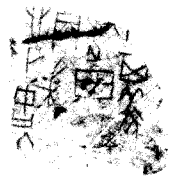
(1)行書の如き表現という言い方もする。

(2)次の図の様な文字は現行より見て決して行書と見られるものでは

ないが、行書に似た動きや歪みが見られる。それが自然に行書的

な表現になったのだろう。文字の表情は生きて見える。その様な

類の書表現。



殷 甲文(原寸)
改訂新版
書道芸術II
(中央出版)
資料(8-1)



(争) 動きのおもしろさに注目
してほしい

資料(8-2)
展大甲骨文字精華
木耳社

(二)私案行書とは、
現行の行書は勿論、行書表現、行書の表現、(行書の如き表現)のすべてを行書として取り扱う。私の考えた行書、又その行書の領域を示す。

私は中国の書の古典を学ぶ上に於いて、楷書・隸書と共存する行書以外の行書表現(行書・行書の表現)に度々出会った。これらも行書と呼びたいが、現行の理解ではそうなっていない。それを行書の領域の中に入れるには従来の行書領域の拡張を考えることが適切であろうと思う。

(中)に対して(行書の存在位置的理解)

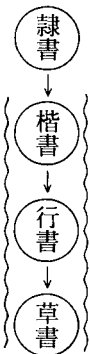
楷書と草書の中間点に行書が存在するという考え方に對しても反対である。それは、現代の人が、現存するものを見て楷書・行書・草書しかも、唐以後の三者の立場から比較した結果から生まれた考え方であり、略し方は行書と草書とでは成立の基盤が違うからである。

前に示した(中)を図示すると次の様である。

(中)行書の存在位置的理解に対する現在の考え方。

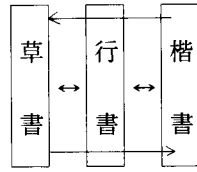
○歴史的に見る楷書・行書・草書の三者関係。

(行書は両者の中間に存在する)



資料(9)

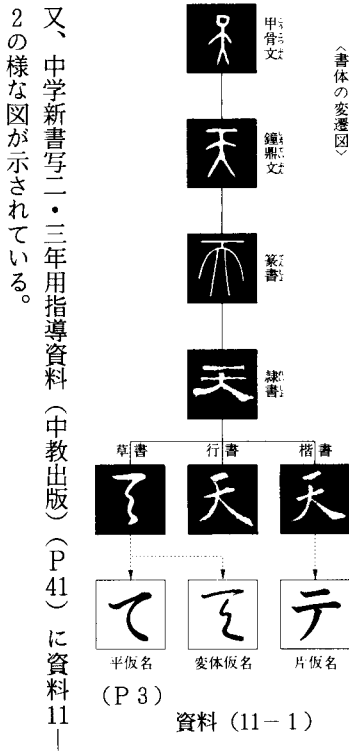
○学び方の面から見る三者の関係。
 (行書は両者の中間に存在する)



資料(10)

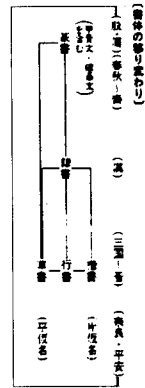
楷書を学んでいて、草書を学ぼうとする者は、必ず、行書を学ばなければ草書は理解出来ないとする考え方。行書を学んでいる者は楷書でも草書でも次は自由に学べる。草書を学んでいる者は行書を学ばなければ楷書を学ぶことは出来ないとなる。

それに対して書道芸術Ⅰ(改訂新版・中教出版)に次の様な図が示されている。



資料 (11-1)

又、中学新書写二・三年用指導資料(中教出版)(P 41)に資料11-2の様な図が示されている。



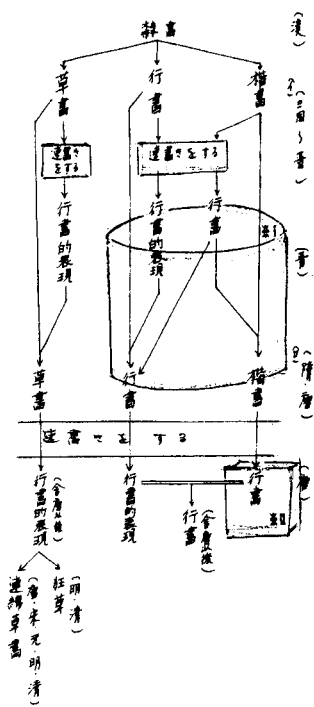
資料 (11-2)

私はこの考え方には反対する
 (一般的にはこんな考え方もある) 資料(12)

充分比較してほしい。

○行書の存在的位置的理解に対する私見

学び方は位置関係と比例するから、この場合、隷書をまず学んで楷書・行書・草書へと進む、三国(晋)での三者の関係は隷書より薄いものと見る。
 図にすると次の様になる。



資料(13)

※1 この空間に真書(後述P 29を参照)が存在する。

※2 この空間での行書は楷書を速書きしたもので、楷書を学ばな

ければ書けない。(例、顔真卿の作品で考えると、争坐位稿を学ぶ時はまず建中帖等の楷書を学び、その後でないと絶対と言ってよい程書けない。)

(D)資料(13)の三者の位置関係は次の様になる。

三者(楷書・行書・草書)の関係は対等である。(イ)は隷書を母体として、(ロ)は独立した上での対等なる三者の成立を見ることが出来る。但し、行書は幅広い領域を持つので一言では行書を語ることは出来ないことが分かる。

この(中)の考え方は唐以前の書の流れの理解不足より起きるものであって楷書そのもの、草書そのものに対しての不十分なる理解から起きるものである。初心者に対しては一応説明がつけられたとしても、広範囲な又、十分なる書体の研究が進むならば誰でもおかしく思い始める。(E)ここで又、定義付けをする。

(イ) 正書体

(ロ) 非正書体

(イ) 正書体

伝達内容をより正確に伝えようとして、感情表現をおさえ丁寧に一画一画正確に筆を運び表現されたもの。

整然として心を正しく緊張感に満ち、造型を美しく整えたもので、時代の変化と共に名称(例篆書・隸書・楷書)とその形体を簡略化、時には複雑化に向けて変化する体質を持った書体集団と理解するとよい。

正書体は篆書でいうと泰山刻石資料(14)。隸書でいうと礼器碑資料(15)の表現である。



泰山刻石
資料(14)



礼器碑
資料(15)

(書道全集平凡社)

(ロ)非正書体とは

伝達内容と感情表現を共に合わせて表現するあまりに感情が高ぶり、意識表現が極度になされる為、定型の文字(正書体である篆書・隸書・楷書・草書又、中国の簡略化文字)を母体として、自由な書表現によって速書きが始まったり、文字に歪みが出たりする。この文字と造型の変化によって形成される書体集団と理解するとよい。

(F)非正書体の発生には、次の二つが考えられる。

(イ)正書体を表現する上に於いてちょっととした気の緩みから造型が変化したもの。

(ロ)正書体とは無関係に作者の感情に伴い線自体自由に、文字自体も自由に変化させようと、作者自身が初めから非正書体として意識表現したもの。

非正書体は、篆書で言えば竹簡資料(16)、隸書で言えば木簡資料(18)に表現されている行書的表現を指す。

書道Ⅱ(東京書籍)

少得きて其へ陽土布サ御ミチノキ

資料(16)

書道芸術Ⅱ(中教出版)

家ゴウノミチノキ

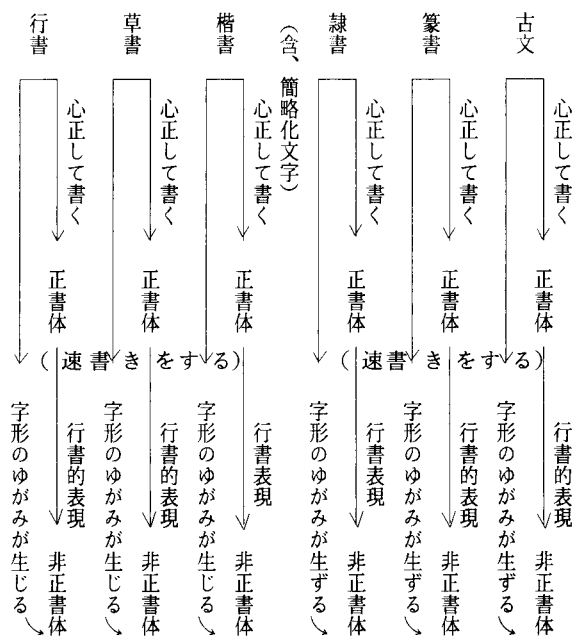
資料(17)



資料(18)

行書は精神的な表現によって一層形や線のリズムが変化する。その時の書表現されたものは「正書体」「非正書体」の分類により鮮明にされる。

(G) 正書体・非正書体の成立に対する私見



(正書体・非正書体の成立に対する私見図) 資料(19)

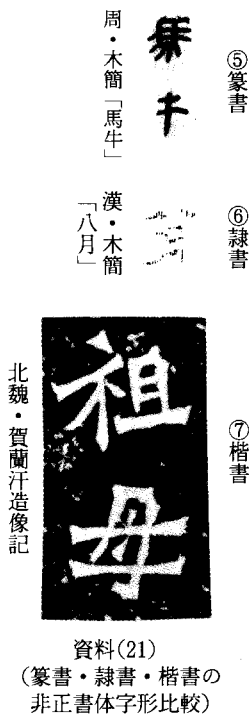
次は、より具体的に書表現を観察するために正書体・非正書体を中心としての六体から行書を見ることにする。

六体とは古文・篆書・隸書・草書・楷書・行書の書体をいう。書体には他にも色々あるがここでは六体に話を絞る。

現行の六体に対する考え方におおむね賛成であるが、行書だけは問題が残る。



一般的には①②を篆書、③を隸書、④を楷書と呼ぶ。又①④が共通する形体表現を正書体と呼ぶ。次の⑤を篆書、⑥を隸書、⑦を楷書に分類する。そして⑤⑦が共通する形体表現を非正書体と呼ぶ。



書体は伝承と破壊そして創造を繰り返して、複雑化と簡略化の絡み合いを持って、非正書体から新しい正書体を生み、又正書体から非正書体を生むといった、度重なる繰り返しのことによって現代へと至ったのである。

故に時代によって正書体は篆書・隸書・楷書と名称を変え、非正書体はその都度正書体と共に存在して次の正書体を生む原動力となってきた。

書の古典を分類する時、単に六体の区分のみでは不十分であり、正書体・非正書体の組み合わせが必要となる。

この両者の理解が深まるにつれて、行書の成立過程、行書の存在位置、行書の持つ生態、行書とは何か、現代社会が求める行書の必要性など、多方面に渡る行書領域の再発見へと駒を進めることが出来るのである。

(F) に対して (行書の起源の問題)

前記した様に、行書の起源は漢代かもしれない。しかし、行書表現・行書の表現の取り扱い方が問題となる。

周代の竹簡にて見られる篆書の行書の表現。金文又、甲骨文にて見られる文字の歪みに表われる行書の表現をどの様に取り扱うかが問題となる。行書表現・行書の表現を行書とする私案行書が成立するならば、行書の起源は変わってくる。

私は行書の起源について次の様な疑問を持つ

△これまで通り漢代でよいのか？

△殷代にまで遡るべきなのか？

△殷以前人類が線を描写し始めた頃なのか？

これに伴い行書の芸術的完成時期も現行の理解と異なってくることは当然である。

前記より次の語句を引き出してみた。

① 楷書 ① 行書の表現なる書体

② 隸書 ② 行書の表現なる書体

③ 篆書 ③ 行書の表現なる書体

ここに並列された語句の中から傍線①②③の共通部分を取り去ってみた。そして後に残った楷書・隸書・篆書の書体名に改めて目を向けてみた。

傍線①②③は、

○時代によって名称と形は異なるものの、そこには共通して正書体としての姿が存在していること。

傍線①②③は、

○非正書体として共通する。

○人間の精神的動向が主で、個人感情が中心となる。時や空間を越えても不変的に存在する表現による、一貫した自由表現とその中に於いての美しさを持ったもの。

○各々の形は主たる正書体によって変化する。

これより、楷書や隸書を速書きしたものを行書とするならば、篆書を速書きしたのも行書と見てよいのではないだろうか。

(H) ここで定義付けをする。

(I) 私案行書とは、

P 12を参照の上、一つの書体の領域の一部分として、常にその正書体と共存するもの。

(H) 行書体としての横の繋がりは、

書体としての造型構造より、書人の指針と感情の交差、作者の心理描写が主となる。

(H) 行書体とそのものの存在価値は、

時代を越え、空間を越えて、たとえ主たる正書体の名称が変化しようとも変わらない、行書が行書として存在する行書たる所以を持っていること。

篆書・隸書・楷書の一群形体集団の整った美しさを主にした正書体と、背中合わせに心理的表現形体集団として自由性を基盤にした行書が存在する。

この考え方は、現行での行書の理解では変に思われるに違いない。逆にこの考え方に立てば、現行の行書の認識改訂の必要性が出て来るのは当然である。

竹簡や木簡が現存する限り、行書の認識改訂や常識の変化は必要不可欠のものとなってくる。

この事での問題の数々は、この論文の結論と関わってくるものであるから軽々と断定出来ないが、この行書表現の位置するものと、領域問題だけは頭中に置く必要があるだろう。

第二節 行書表現の出現期

これまで行書が存在する位置について多方面から見て来たが、行書に対する認識を深めるため行書の表現の出現期を次の三つから見ることにする。

1 甲骨文からの考察

「殷代の書」と問われると、誰でも直ぐに「甲骨文」と答えることだろう。しかし、殷代の物として、次の様な陶器に筆で書かれた肉筆の書(資料(22))や、陶片に刻された符号のようなもの(資料(23))も見された。だから、殷代の書と問われて単に甲骨文と言いつれなくなつた。

資料(22)は台湾の台北市にある台北市中央研究院蔵で、殷墟より出土した白陶器の残片である。この書は筆で書かれており、書表現は甲骨文字の入筆・終筆とよく似ている。線の中心部は甲骨文よりやや太めで思いついて線を引いている。甲骨文より活力が感じられ、非正書体というか、行書表現を見せている。

資料(23)は西安市の半坡遺跡より発見された陶器類である。この中には刻された符号のような線表現されたものがある。文字とは違うだろうが線表現は甲骨文とよく似ている。この中にも非正書体とまでは言わなくても行書表現が多く存在していた。



資料(22) 自写



資料(23) 自写

(1) 甲骨文の中に於いても行書の表現を見ることが出来る。

『中国書道史上巻』(木耳社)に真田但馬氏は甲骨文について次の様に述べている。

なお、この時期すでに毛筆、現在のように完備されていたとは考えられぬが、毛筆らしきものがあつたと考えられる。それは甲骨に文字を刻むまえに下書きしたとみられる朱の、刻み残されたものをとくに見かけること、甲骨文字のなかに『朱』などの毛筆を手にもっている官吏を表わした文字のあることよって知られる。いろいろな意味において、甲骨文字が書道史資料としても重要な意味を持つようになった。(四頁)

資料(24)

殷代および殷代以前の陶器に筆で書いたように、甲骨文に於いても始めは筆で書いていた。このことは中国や台湾を旅して自分の目で見て分かった。筆で書かれている為か甲骨文の中に於いても行書の表現を見ることが出来る。そこでこの表現をどう解釈するかになってくる。現存物を見る限り殷周時代に於いて文字は正書体として書くことの意識が強い。文字を自由自在にのびのびと書く意識は薄い。だから、今見られる甲骨文字の行書表現は刻中に意識を持って表現されたのではなく、刀や筆を持って真剣に書いた後の少々の気の緩みが、一言では言い表わせないこの表現を生んだと見ている。甲骨文字での文字表現は決して一定の基準内での表現ではない。例えば、動的なもの、表情の豊かなもの、温か味のあるものと、行書の表現は数多く見られる。そ

れは下手だった為ではない。人の心が自然に作りだした遊びにも似た表情と見るべき物で、人間味の現われた瞬間とでも言える表現の集団である。

だからと言って、この歪んだ形・動きのある造型を直ぐに行書と呼ぶべきではないだろう。又、行書の出現期と言ってしまふのは早計であるが、ここに行書そのものの持つ生態を私は見る。

甲骨文に見られる行書表現は行書を真に理解する為には看過出来ない一要素である。



資料(25)
(展大甲骨文字精華・木耳社)



資料(25) (東京書籍)

この甲骨文の資料(25)(26)での表現を「古文・篆書・隸書の正書体を揮毫中に於いて、ぴんと張り詰めた緊張感が解けかけた一瞬に出来た文字表現で、この文字表現は行書の世界へ飛び出し始めたその時と違ってよいだろう。」と思う。

この行書の表現は、単に漢字文化圏のみで見られるものではない。非漢字文化圏に於いても人間が表わす線から、生命感溢れるこの行書の表現を見ることが出来る。

- (J)更にもう少し具体的にまとめてみると、
- (イ)自然な線が描いたリズム
- (ロ)東洋民族の感情表現から伝達される生命感溢れる線

- (ハ)古代エジプトが残した文字・彫刻等に刻まれた線
- (ニ)全世界にて見られる模様の色々

(ホ)人々が書くサイン

(ヘ)古代ヨーロッパに於いて見られる文字や絵画・彫刻の数々

それらを刻みつける作業や描く作業の中に於いて、生命感溢れる作品としての要因である線一本一本からの行書の表現を見つけることが出来る。

実にこの行書の表現は全世界の人々の文化的感情表現の主因となっている。

東洋・西洋を問わず、人々が表現する線は生命力を膨らませ生きていく。動いている。その一本一本の線は独立し、一つの形を成していく。そしてその線はリズムを有して綿々と連なっていく。これが行書の表現である。又、これこそ行書の出現期を現行の理解よりも更に遡らせて考える所以である。

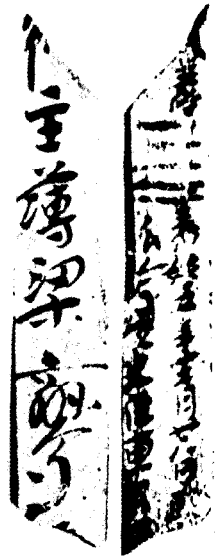
行書の表現は書の世界のみにて語られるものではなく、又、留まっていられるものでもない。時代や国の違いにより、ただ造型の変化によって、たまたま東洋の書の世界に於いて「行書」と呼ばれるに至ったのである。

だから「行書の表現は漢代から存在する。」又、「行書の起源は漢代とする」の考え方はあまりにも狭すぎる。この甲骨文を学ぶことによって、行書の表現は書の世界以外の中でも動行していることに気が付く。

2 竹簡による行書の表現

竹簡(楚簡等)が発見され、それまで見ることの出来なかつた篆書の行書の表現をこの目で見ることが出来た。

初めて竹簡に出会った時「これは一体なんだ」と思った人は多かつただろう。一九〇〇年前後の人々の驚きは、想像出来る。当時としては考えもつかない書表現だったからである。



晋代の木簡
行書表現
非正書体

資料(32)



(漢・木簡・行書表現)
(中国美術全集より) (中国)

資料(33)

木簡(漢代)の発見も大変な出来事であった。それまでの書道史に於いて、漢代では「後漢の漢碑」が中心であり、「波磔と藏鋒」が主役となっていた。前漢の漢碑の古隸を見て、下手な人が書いた作品などと印象を受けただろう。それまで前漢の漢碑の存在についてすら目を向けられていなかった時、篆書から漢碑への移行に不自然さを残していた時だけに、この木簡を見たのだから仕方ないこともある。当時は隸書自体の解明もされず正書体の漢碑のみ研究や学習の対象となっていた。

しかし、この木簡の発見により隸書の広範囲な姿と自然な書体の変遷、篆書から隸書への道を知ったのである。

木簡には次の様な書体表現が見られる。

- 篆書表現の木簡
- 隸書表現の木簡
- 草書表現の木簡
- 行書表現の木簡
- 楷書表現の木簡

のように、表現の内容は豊富である。その豊富な表現内容により、篆書から自然に古隸・草隸・八分・章草そして草書や行書・楷書へと自然な書の変遷を知ることが出来た。

正書体としての顔を表にしている書体の一つ一つにすべて非正書体の存在があることが明らかになった。

秦代から漢代への書の流れが説き明かされて、木簡が発見される以前の隸書に対する考え方は根本的に崩れてしまった。

又、この木簡発見を根拠として行書の存在を漢代に置くことに問題はないが、行書の起源を漢代とすることには賛成出来ない。

現行の行書の存在を漢代に又、行書の起源を漢代とする考えは、木簡の発見によって隸書の領域に楷書表現と行書表現が存在していることから「行書は楷書を速書きしたもの」の通念上、一応成立出来る。

仮に、この進展が愚見の広範囲に行書を捕らえる考え方から転換されたものであるならば、竹簡の中に見られる篆書を、速書きした行書表現を、行書とすることも当然のこととして浮上するだろう。いま竹簡や木簡が現存している上に於いて、現行の「行書の起源は漢代」で留まっているのには、もどかしさを感じてならない。

新資料の出土があれば更に論を進めてみたい。

第二章 行書考

これまで行書が存在する位置について考えて来たが、これからは行書が完成されるまでの道程を「晋代の残紙」「蘭亭叙」を中心に行書とは一体何かまで含めて考えてみたい。

第一節 晋代の残紙より見た行書考

漢代より三国へと国は移り、書体も隸書から真書(資料(54)(59)参照)と呼ばれる新しい姿の楷書へと変化する。それに伴い正書体も自然に

移行する。その道程には行書と呼ぶにふさわしい表現が同居する。それは、主に木簡・残紙の中に於いて見ることが出来る。

その木簡・残紙の筆者と同時代か、もしくは少し遅れて書道史にその名を刻しているのが王羲之である。

王羲之は、行書を学習する上に於いて欠かすことの出来ない人物である。

王羲之の真跡で現存する物はなく、皆、後人の写本や臨書本によるものである。従って王羲之の書と、現存する王羲之の影本との間にはかなりの相違があるだろう。それは今日見られる王羲之の書と晋代の木簡や残紙を比較してみるとよくわかる。

王羲之の作品としていま見ることの出来る品々はあまりにも隋・唐時代の人々の書に似ている。たとえ隋・唐時代の人々が王羲之の書を学んだ結果のものとしても納得出来ない。この両者の相類似は隋・唐時代の人々によって書かれた王羲之の影を見ているにすぎない。

いま王羲之の真の姿を探る時、木簡・残紙の中に於いて探究する方法が妥当である。晋代の木簡・残紙と、王羲之の作品とされているもの一つ一つを見比べて、王羲之の真の姿を想像学習する必要が出て来る。

王羲之の真の姿を探究するその目的は、この晋代の行書の生態を理解することにある。

隸書で代表される石碑から木簡・残紙へ、木簡・残紙から北魏の楷書で代表される石碑への移行時の、自然な書の変遷を理解する上に於いて晋代の行書の生態を探究することは重要となる。

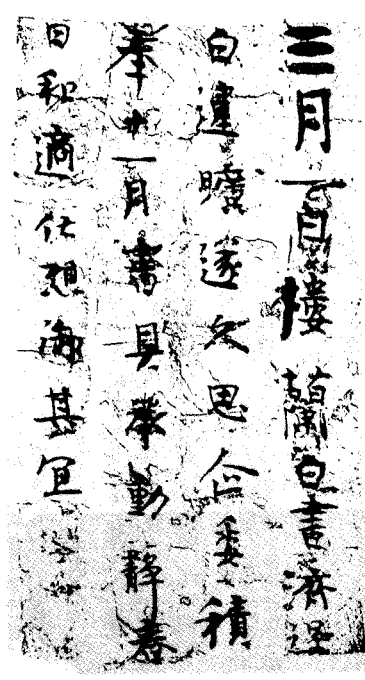
まず晋代の行書の生態を探究するためには木簡・残紙の学習が必要となる。それは肉筆として晋人の書いた幅広い行書の姿が数多く現存しているからである。

晋代の行書は、楷書（二国、晋の小楷書）を速書きしたものというより隸書を速書きしたものと考えた方が理解しやすい。晋代の行書は、

楷書と行書の繋がりより、隸書と行書の関連は濃厚である。

隸書の八分・章草を速書きしたものを行書と呼ぶように、隸書から楷書（含真書・小楷）への移行時の造型を速書きしたものも行書と呼ぶ。又、楷書（含真書・小楷）を速書きして行書が生まれており、行書の成立と行書の幅の広さをこの時代の書は見せている。

それでは、どんな残紙が王羲之の真の書に近かったのだろうか。その為次に次の二つ「晋代の残紙」と「李柏文書」を示す。



(残紙の中にて見られる正書体表現) 資料(35)

(非正書体)



資料(36)



李柏文書と共出の文書 (草書であるが正書体) 資料(34)



(非正書体)

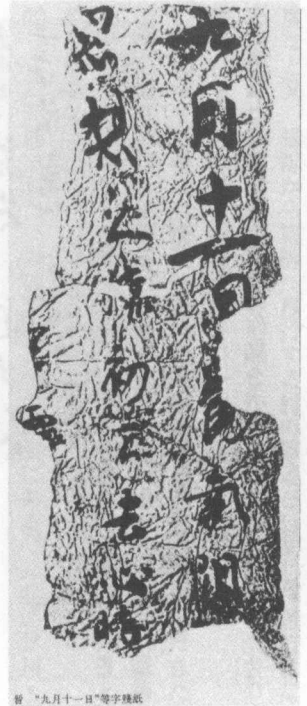
資料(39)



晋代の残紙

(非正書体)

資料(38)

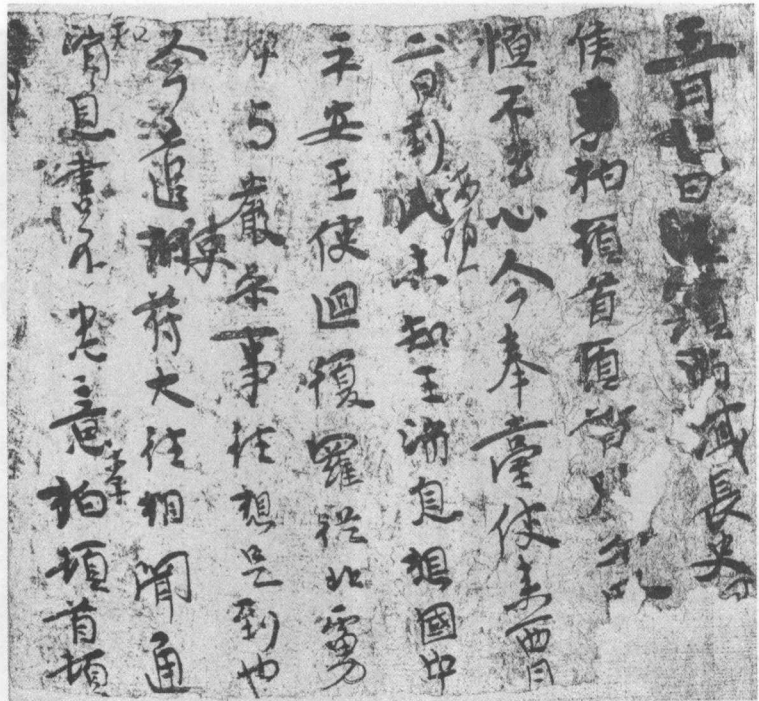


(中国美術全集)

晉「九月十一日」等字殘紙

資料(37)

(正書体から非正書体への移行)



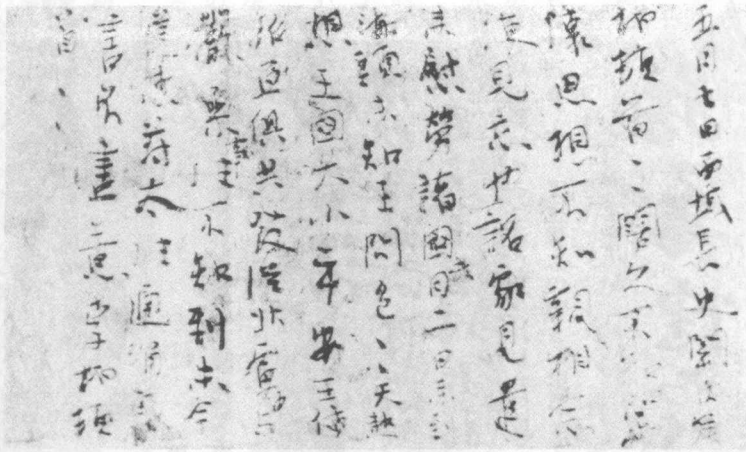
(中国美術全集)

資料(40)

李柏文書(一)

(正書体)

李柏文書(一)



(非正書体)

資料(41)

(中国美術全集)

次に残紙と対比する王羲之の作品を示す。

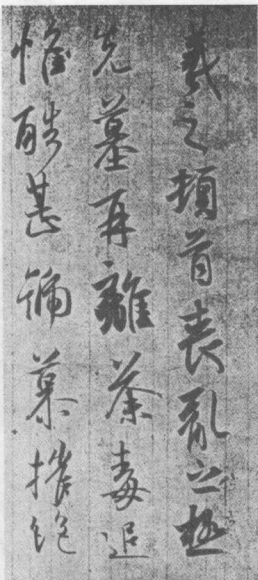
(王羲之・姨母帖・正書体)



資料(42)

(中国美術全集)

(正書体)



喪亂帖

日本の奈良・平安時代の日本書道の源流となっている(在正倉院)

この作品は唐人による双鈎填墨本である

資料(43)

王羲之の行書作品としていま見ることの出来るものの中で真実性の強いものに次の「姨母帖」資料(42)がある。この姨母帖は隸書を速書きした行書である。隸書を速書きした行書の風味としては先の残紙や李

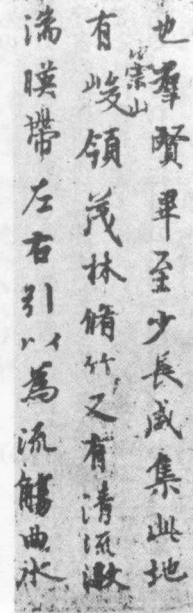
……。

ここで王羲之の作品として有名な蘭亭叙について述べる。

蘭亭叙(三五三年)も王羲之の真筆は現存していない。唐代に臨書及び摹本として作られたものが現存しているのである。その中の三つをここで示す。

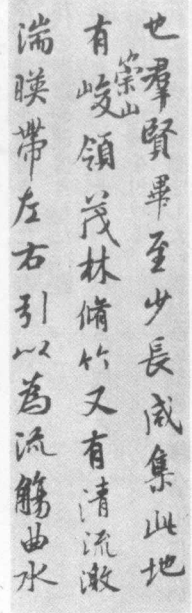
蘭亭叙

唐・虞世南臨書本
寶曆八年第一本
(故宮博物院)



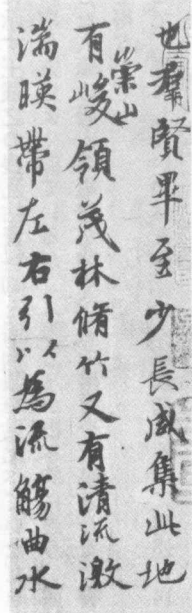
資料(45)

唐・虞世南臨書本
寶曆八年第二本
(故宮博物院)



資料(46)

唐・虞世南臨書本
寶曆八年第三本
(故宮博物院)



資料(47)

(M) それでは真の蘭亭叙ははどんな姿をしていたのだろうか。私見として次の様に示す。

(I) 形は第一柱本に近く流れや躍動感は第三柱本に近いものと想像する。

(H) 王羲之が蘭亭叙を晋代に書いた説の上に立ち、晋代の行書(隸書を速書きした上での行書) 表現の上に蘭亭叙の臨書観を成立させる。特に入筆の藏鋒には気を配り、王道を行く文字の構成を第一柱に置き、第一柱本と晋代の残紙との比較学習により真の蘭亭叙を想像する。

次に蘭亭叙を臨書する上に於いての私見を示す。
(N) 臨書する者は何本を学ぶべきか。

これは大切なことである。臨書するもの(素材)の選択を誤ると大変なことになりうる。まず、各本が主張する蘭亭叙の表現に目を向け晋代の行書と唐代の行書の相違を判断することから始めなければならぬ。

その時、もし仮りに第二柱本を選んだとすると、自然に藏鋒の意識はなくなり、品格も失いかねない。形の変化の追求のみになり、蘭亭叙を臨書すること自体がその人の害になっていく。第二柱本の中には宋以後の人の書と思われる表現が多く、鑑賞にはよいが、臨書する上には不適當と思う箇所が多いからである。

王羲之の存在の肯定と、王羲之の作とした上での考え方は別としても隸書を速書きした行書が基盤となる蘭亭叙の臨書でなければ、蘭亭叙を学ぶこと自体意味を失うこととなる。

蘭亭叙を学ぶべきか、否かは、その作者が王羲之であると言ふことより、晋代に書かれたものの風格を持っているか、否か、によるのである。その上に於いてこそ蘭亭叙の学習の重要性は語られる。

蘭亭叙は晋代の作品でなければその価値すら失うことになる。

第三章 正書体と非正書体

行書を理解するためにはその時々での行書の生態を理解する必要がある。ここではその行書の持つ生態を理解するために、前述P11・

P14に於いて示した正書体・非正書体について立場を変えて述べたい。まず陰陽の比較から書を見つめ、行書を考え、正書体と非正書体の必要性へと話を進めることにする。

第一節 陰陽の比較から見た行書考

ここで少し陰陽法が書道の中で生きていた姿を見ることにする。物には表裏がある。陽のあたる所があれば陰もある。

この陰陽の絡み合いから核分裂が起り、これに賛成する諸説へ、これに反対する諸説へと広がり、中国の思想は色々な説へと分かれて思想学を形成している。

書もこの中国の思想学の影響を受け、筆の運び方(筆法)や人の感情(氣)の絡み合いによって成り立っている。

書作上に於いて、書法的陰陽説的考えは多彩な基盤として存在し展開されている。

運筆に於いては、筆の開閉・俯仰法・側筆ならびに直筆・左右の斜筆・藏鋒と露鋒に至るまで筆の妙味は書陰陽説を物語る。

入筆・運筆の角度。運筆時の遅速の変化によって線は輝いて来る。筆を押し・引くによって出来る太い・細い線。多方面から加わる筆圧によって生まれる線に、紙と筆との触れ合いによって微妙な線を醸し出す。そして、線の妙味は尚、一層冴えてくる。

又、人の感情もこの陰陽が絡んで来る。

感情的陰陽での比較では「喜び・悲しみ」から始まり、「氣」の問題を含ませて考えることになる。

「喜び」からは、ほほえみ・笑い・愛・あたたかさ・優しさ・はしゃぎ・華やき・ときめき・交わり・きらめき……。

「悲しみ」からは、怒り・なげき・涙・憎しみ・冷やかさ・落ち込み・暗さ・さめ・離別・くもり……。と、色々な感情表現へと広がっていく。書がこれらの感情によって展開されていくことは言うまでも

ない。特に私案行書はこの二つの集団が基盤となっている。

行書は他の書体以上に、書法面にも感情面に於いても影響される。

書陰陽として正書体・非正書体、心正す書・心くつろぐ書は含まれ重要なものとなる。これらの絡み合いに於いての書の理解は以上に行書を知ることが出来ることだろう。

第二節 正書体・非正書体考

人は文字を創り出し、その文字によって色々な感情を人々に伝達してきた。

いままで、現行の書の分類に対して、私は次の様な疑問を持っていた。(イ)時代の流れと共に名称が移り変わった書体の分類の他に感情表現を中心にした分類はないものか。

(ロ)どんな時が流れても変わらない、人の感情表現を主にしたものの分類はないか。

(ハ)六体を細分化して人の感情表現の度合いを鑑みた分類はないものか。その結果

(1)時代の流れによって作られた書体の上に、特に形式を重要視したもので「静粛なる中、心を正しく終始一貫して書かれた書の形体」。

(2)、(1)の形体と背中合わせに存在し自由性の中、人間の自由なる感情表現を主にして作られ、「その時代の正しき書に非ざれども自由なる類の心にて書かれた書の形体」をP22く24にて「正書体」「非正書体」と定義した。

○次にこの両者の関係に対する私見を示す。

(イ)正書体と非正書体はいつも背中合わせに存在する。

(ロ)正書体と行書(行書表現・行書表現)はいつも背中合わせに存在する。

(ハ)行書は非正書体の支柱となる。

(ニ)正書体・非正書体の区別は書く時の書人の心構えが関係する。

(*) 行書を含む、正書体・非正書体の関係は一寸した事でその立場を
変化させる。始めは正書体であっても感情表現が加わることによ
り、自然と文字に歪みを生じ非正書体の世界へ入っていく。又、
非正書体として揮毫していても一寸した刺激で緊張感に満ちた時、
非正書体から正書体へと文字表現は変化する。

(-) 正書体・非正書体の区分に於いては行書の捉え方が問題となる。
(ト) 行書を含む六体と現代中国の簡略化文字(草書を母体とした新活
字体)の中にも正書体・非正書体は存在する。

(草書における正書体と非正書体)
行書をより理解するために「草書」に於ける正書体・非正書体の区
分が可能か不可能かの問題に触れてみる。

正書体である篆書・隸書・楷書と同じ様に草書を正書体として見る
ことが出来るか、否か、結論から言うと、私は「草書も三体と同様に
正書体と非正書体を有している。」と思っている。

一般的に草書は隸書の非正書体と見られている。確かに隸書から草
書は生まれている。しかし、それは隸書から草書への移行期間を捉え
ての見方であって、草書は書体として独立した主体性を備えている。
なぜならば、草書にも正書体を有しているからである。

時節草永

草 章
資料(48)

十七帖(部分)

草書の正書体とみら
れる部分
資料(49)

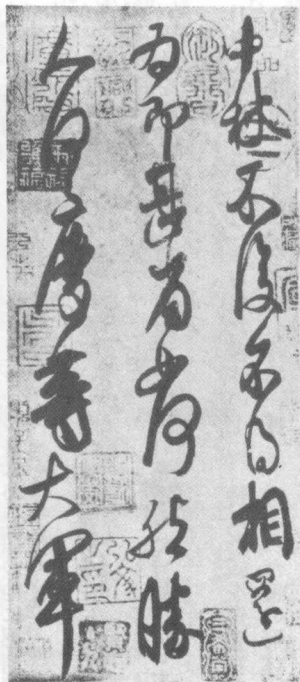
又、他の書体同様、他の書体を生む母体としての体質を備えている
ことにある。

篆書を母体に隸書が、隸書を母体に楷書が生まれたように、隸書を
母体に草書は生まれた。そして草書を母体に中国の簡略文字や日本の
仮名が生まれている。

草書は一つの書体の非正書体としての姿は一時あったとしても、そ
れほどの書体にもある移行時の状態と見るべきで、草書にも三体と共
通する母体的要素が共存する。

草書にも正書体と非正書体の区別は出来る。一見不思議そうに思え
るが、草書の行書表現は存在する。

正書体



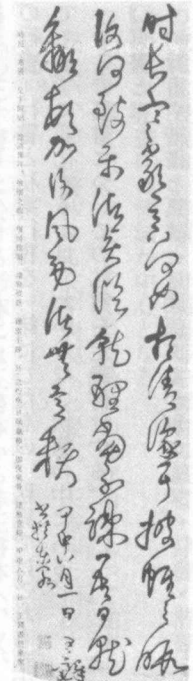
王羲之の中秋帖
資料(50)

王羲之の十七帖や漢代の章草に見られる草書は単体を取り、形は略
されてはいるものの整然としている。又、王献之の中秋帖資料(50)は、
連綿体を取っているが、やはり整然とし緊張感が漂っている。草書の
正書体はこの様に緊張感に満ちた中、文字の形は省略されながらも篆
書・隸書・楷書の正書体と変わらない姿を見せている。

晩唐・宋・元・明・清の時代の草書資料(51)は前者と異なり表現に自
由性が多く、これを非正書体と見る。そして草書の行書表現をそこ
に見る。

王鐸の書

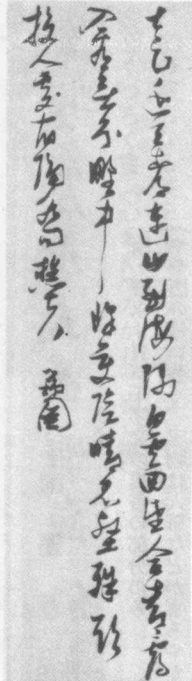
非正書体



資料(51)

張璠の書

正書体



資料(52)

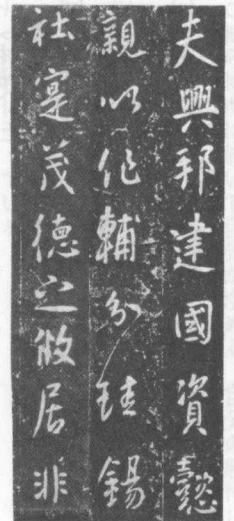
次に「行書」の正書体・非正書体が存在するか、否か、の問題に触れてみる。

まず、唐の太宗皇帝の作品「晋祠銘」資料(53)について見よう。

太宗がこの晋祠銘を揮毫した際、始めから行書作品としてこれを書いたかどうかである。

次の様な私見を示す。

始めは行書として書こうと思っていたのに、書き出しの緊張感が少しづつほぐれ、その精神的変化によって行書へと変わったのではないだろうか。晋祠銘に於いての書き出しの緊張感は隷書であり、楷書でもある。次第に行書としての形へと速書きが始まっていく。しかし、いくら形は繋がりを見せたとしても一貫した緊張感は最後まで存在している。正にこれは正書体である。



〔石碑は従来 篆書・隷書・楷書とかぎられていたが、太宗は初めて行書で碑文を書き、唐代の行書碑建立の先がけとなった〕と一般的に言われている。
唐太宗 (597~649年) 正書体
晋祠銘 (646年) 資料(53)

しかし、終始一貫した緊張感はまだ行書の行書たる姿として片付けられないが、行書であることに間違いはない。

(P)ここで行書に於ける正書体・非正書体の私見を示す。

(イ)行書の正書体は真書を含む。

(ロ)行書の非正書体を行書(私案行書)と見る。

(ハ)の行書たる行書(私案行書)の領域の広狭が行書そのものを理解する一つとなる。

これより、行書の正書体・真書について触れてみる。

綜合書道大辞典は次の様子的みある。

真書 しんぶん ↓ 楷書 しかい 資料54

又、鈴木方鶴氏は同辞典にて楷書の説明の中に、

楷書 しかい 漢字の書体(篆・隷・楷・行・草)の一つ。正書とも真書ともいう。現在の楷書がいつできたかは、はっきりしない。晋唐人は楷書を今隷と称していたことは、晋の王羲之や初唐三大家の伝記に、現在見るような楷書を評して、「隷書に巧なり」と言っていることでも知れる。……略……

資料(55)

とある。(正書体については、前述P11で触れた)真書に対する私見はこれと異なる。

唐代の楷書のことを真書とは言わない。三国・晋代の隸書・楷書の正書体集団を小楷と言っても真書とは言わない。

真書は三国・晋にも見られるが、皆、行書の正書体と見られるものばかり、真書は楷書のように楷書でない。行書のように行書でない、真書はそんな姿である。

現存の真書は隋の真草千字文資料60が有名である。

真草千字文の真書の部分は、気が緩むことによって行書表現が字形に及んだのではなく、私はこの真草千字文の真書を隋時代の通常文字形体の正書体と見ている。



資料(56)

隋・智永・真草千字文の真書の部分のみ

(やや唐の匂い強く、実物は入筆などがまろやかだったと想像出来る。)

行書の正書体(含真書)は現行の行書表現を緊張感に満ちた状態で揮毫しないと成立しない。行書の正書体はいっ行書の非正書体(本来の行書=行書と私案行書を一緒にしたもの、私見ではこれも私案行書である)に変化するかは、わからない状態の中にある。

ここで真書についての私案を定義付けする。

Q 真書とは

- (イ) 隸書や楷書と真書とは関係あるが別のもの。
- (ロ) 漢の隸書から、唐の楷書への移行期間に於いて見られるもの。
- (ハ) 隸書と楷書、正書体と非正書体の絡み合いの中に真書は存在する。

(ニ) 形体表現は行書と楷書を合わせたもので、単に楷書とは呼べない。時には楷書と融合する故に、「真書は楷書である」と思い違いを起すのもその為である。

例えば、蘭亭叙も晋祠銘も行書である。私はこの両者とも行書の正書体として見ている。その中に真書としての姿をも見ているのである。研究中、行書と言っても時代によって、作者によって単に行書とも言えず困ったこともあったが、行書の中の正書体(含真書)、非正書体(私案行書)の区別によって行書自体明確になった。

六体の中に含まれている行書は他の五体と存在するそのもの持つ土壌が異なっている。他の五体の存在と席を同じくせず、六体の正書体のある処常に私案行書は存在する。

第三節 心正す書と心くつろぐ書より見た行書考

書表現は心の中で感じた処の表現と大きく関連してくる。人々の生活の中で行動に於ける心理的表現を書表現として見る時、次の二つの見方が出来る。

- (R) 心正す書(心を正しくして書く書)
- (S) 心くつろぐ書(心をくつろがして書く書)
- この二つについて説明を加える。
- (R) 心正す書(心を正しくして書く書)
- (イ) (目的)
他の人に対して示すことを目的とする書。

(ロ) (精神状態)
社会的公務活動に於ける精神状態の中の書。子どもの学校活動で言うところの授業中のこと、体育活動で言うところ「気を付け」となる。

(ハ) (表現)
他の人に対して自らの思想を正しく他の人に訴えるものであるから、読み易く誰にでも理解され易いことが原則となる。

(二) (正書体と非正書体の関係)

○主なる表現は石碑類・青銅器等を舞台に篆書・隸書・楷書・草書・かなの正書体の領域が中心となる。

○心正す書を貫くあまり、その反動的な心理作用によって途中で自分を見失い、非正書体なる文字表現へと変化し正書体と相反することもある。

○「心正す書」に於ける形体には正書体から非正書体へ、又、非正書体から正書体への領域移行が見られる。

(ホ) (現状)

心正す書は書の権威的な表現の役割が主となり、その上に於いて文字の整形なる美を求めつつ現在に至っている。

(シ) 心くつろぐ書 (心をくつろがして書く書)

(イ) (目的)

自分が楽しむことを目的とする書。

(ロ) (精神状態)

家庭的活動内で心休めた精神状態の中での書。子どもの学校活動で言うとき休み時間のこと、体育活動で言うとき「休め」となる。

(ハ) (表現)

「自分に対して」が主体となるからあくまでも自由なる思想が基盤となるから、読み易いとか、理解され易いといったことからは離れた処に展開する。

(ニ) (正書体と非正書体の関係)

○主なる表現は竹簡・木簡・紙帛を舞台に篆書・隸書・楷書・草書・かなの非正書体として行書の領域が中心となる。

○あくまでも「くつろぎ」の中での書であるから社会生活からの脱出を意味する心理的表現が中心となる。故に反社会生活となる個人的存在表現の領域内での書表現であるから当然自由な表現もあれば、緊張感に満ちた表現もあり、非正書体と相反することがある。

○その時々々に於いて自分が求める、自分の感情に従うことから、心くつろぐ書には非正書体から正書体へ又、正書体から非正書体への領域移行が見られる。

(ホ) (現状)

心くつろぐ書は人の心と結び付いた感情表現を伝える役割が主となり、その上に於いて自由自在な文字のデフォルメの中、美を求めつつ現在に至っている。

この両者は書作にする上での心理表現を意味し、書そのものの存在価値を形成する。特に行書は心の中の感情表現と大きく関連を持つ。行書について認識を深める時、この両者の比較と正書体・非正書体を兼ね合わせる時、行書の表現の領域の理解は鮮明なものとなる。

おわりに

以上、三章に分けて行書について多方面より論及したつもりである。

以下にその結論をまとめてみよう。

私は従来の行書の理解に対して疑問を持っていた。

現代の行書に対する理解は、周知のように、「行書は単に楷書や隸書を速書きしたもの」ということである。今ここに改めて「篆書を速書きしたのも行書である」と、一般的意見の範囲に付け加えられても、行書を説明する上に於いて以前の考え方と比べて進展はなんらみない。私見は行書の領域をもっと大きくみていることの理解を望む。

(一) そこで小論に於いて次の様にまとめてみた。

(イ) 行書の表現の起源は人類が文字を書き始めた時からでなく、もっと以前一本の線を引き始めたその時からであるとした私見と、この行書の表現と行書の関連。(前述P12)

(ロ) 行書・行書表現・行書の表現・私案行書の一本化。特に大きな目標は、周・秦代の行書の表現と行書の同一関係を実証すること。

(前述P 12)

(イ) 私案行書への導き (行書の附属品的理解に対する反論) (前述P 12)

(ニ) 行書の存在位置の広域な理解 (前述P 14)

(ホ) 正書体・非正書体による行書そのものの理解 (前述P 15・P 26) と行書との関連。

(ヘ) 心正す書、心くつろぐ書による行書そのものの理解 (前述P 16・P 30) と行書との関連

等々、一つ一つが行書に対する私考である。どうか、これを敲たたき台にして、改めて行書の持つ使命感の大きさについて論議を重ねていただけることを望んでいる。

いま私たちが行書を学ぶ時、古代人が一本の線を用いて、「愛」や「夢」を初めて刻みつけた時のことを思い出さなければならぬ。その一本一本の線を組み合わせることによって、文字はその後、世界の各地に育っていった。その都度文字は現在まで色んなことに遭遇して来た。

どの国に於いても人々の書いた文字はその表現によって文意を盛り上げてきた。その文字の表現は非正書体であり、行書表現であった。正書体に対する非正書体としての行書表現は、いつも愛や、夢を中心に語り、色々な人々の心と共に存在して来た。その行書の指針たる姿勢は現代まで変わらず、いつも自然に私たちの側に存在している。行書とはそんなものである。

—平成二年十月一日受理—

(本学講師・書道)